

Mahābhāṣya ad P1. 3. 1 研究 (4)

小川英世

1.3.2. [BHĀṢYA]

vt. 2: さらに、[〈読み上げ〉に基づいて 〈dhātu〉 という術語の [規定] がある場合、] 音連鎖範囲の言及 (parimānagrahaṇa) が [なされるべき] である。

さらに、[〈読み上げ〉に基づいて 〈dhātu〉 という術語の [規定] がある場合、] 音連鎖範囲の言及 (parimānagrahaṇa) がなされるべきである。

[すなわち] 限界点 [を有する、限られた] これだけの (iyān avadhih)⁷⁶⁾ [音連鎖] が 〈dhātu〉 という術語を得る、と言われるべきである。なんとすれば、[さもなくば] 〈bhū〉 という音単位は 〈dhātu〉 という術語を得るであろうが、〈bhvedha〉 という音単位は 〈dhātu〉 という術語を得ないであろう、というこのことが、何に基づいて [知られよう]。

[PRADĪPA]

「限界点 [を有する、限られた] これだけの (iyān avadhih) [音連鎖] が」: 「限界点」 (avadhi) [という語] によって、限界点を有するもの (avadhimat) が間接表示されている。それゆえ、特定の限界点によって画定される (viśiṣṭāvadhīparicchinnā) [音単位] に 〈dhātu〉 という術語が規定されるべきである、という意味である。

「〈bhvedha〉 という音単位は」: そしてそれゆえ [〈読み上げ〉に基づいて 〈dhātu〉 という術語の規定がある場合]、〈bhvedha〉 という音単位 [は、〈bhū〉 で始まるもの (bhūvādi) であるから、それに 〈dhātu〉 という術語が適用され、よってそれ] の後に、LATI など [の L 接辞の生起] が帰謬する。

ところで、[伝承されているところの dhātupāṭha 中の] 意味記載 (arthapāṭha) は、[諸「dhātu」項目を]画定するもの (paricchedaka) ではない。なぜなら、その [意味記載] は、パーニニによっては与えられていない (apāṇiniya) からである。

[すなわち、記載されている意味は、ビーマセーナ (Bhīmasena) といった] 学識者 (abhiyukta)⁷⁷⁾ が、[あくまでも] 例示的に (upalakṣaṇatayā) [dhātupāṭha に] 取り入れたものであるからである。[例示的に、というのは、単一「dhātu」項目において] 複数の意味を担うことが経験されることから、[dhātupāṭha 中の各「dhātu」項目に割り当てられている] 意味は、[dhātupāṭha 中に読み上げられている「dhātu」項目にその意味でのみ術語「dhātu」を割り当てる] 制限者 (niyāmaka) とはならないからである。

ノート (10)

ここにおいて、Vt. 1 に続き、〈読み上げ〉に基づき術語「dhātu」が適用される場合 (pāṭhena dhātusamjñāyām) のさらなる問題点が指摘される。もし、ある言語項目が、単に dhātupāṭha 中に読み上げられているということだけによって、術語「dhātu」を割り当てられるとするなら、新規規定として、音連鎖範囲 (parimāṇa) を特定する言明が、このテキストにおけるこれだけの範囲の音単位が、一つの個別的な「dhātu」項目を構成する、というようになされねばならない。これは、例えば P1. 4. 56 prāg rīśvarān nipātāḥ が、{prāg rīśvarān} (「rīśvara」まで) という言明を通じて、P1. 4. 97 adhir īśvare 中の <r-īśvara> という限界点によって境界が示される sūtrapāṭha の範囲に術語「nipāta」の配当範囲を特定するのと同様である⁷⁸⁾。

I. <bhvedha> 提示の Bhāṣya の意図

Kṣīrasvāmin [Kṣīrataraṅgiṇī], Maitreyarākṣita [Dhātupradīpa], Śāyaṇa [Mādhavīyadhātuvṛtti] などの注釈家を通じて今に伝えられる dhātupāṭha は、{bhū sattāyām} にはじまり、次のようになっている。

{bhū sattāyām; edhA vṛddhau; spardhA saṁgharṣe; ...}

この {bhū sattāyām} といった記載事項には、{vartate} (「起こる」) が補足される。したがってこれは、「bhū は存在 (sattā) の意味で [起こる]」というように読むことができる⁷⁹⁾。さらに、パーニニ文法の体系的な視点から dhātupāṭha 中に記載されている「dhātu」項目を見たとき、それは特定アクセントによって発音され、指標辞 (anubandha) を有する。〈bhū〉〈edhA〉の /ū/ /e/ は udātta アクセントを有する (P6. 1. 162)。〈edhA〉の /A/ は指標辞であり、P1. 3. 12 の示すところでは、anudātta アクセントの鼻音 (anunāsika) である。そしてこの /A/ 音は、その鼻音性が dhātupāṭha による原始形提示の段階 (upadeśa) にあるから、P1. 3. 2 により術語「IT」を与えられ、P1. 3. 9 により無条件にゼロ化される。

ところで、体系的な観点からは dhātupāṭha 中の諸「dhātu」項目は、その有り様がこのように性格づけられている点において、自立した個別的な単位であることが前提されている。それにもかかわらず、当該 Bhāṣya は、〈bhū〉〈edhA〉という二つの単位の複合形 〈bhvedha〉に術語「dhātu」の適用の可能性を指摘する。

当該 Bhāṣya は、パーニニの dhātupāṭha に関わって、その一つの形態を示唆するものとして、諸注釈家たちの関心を集めてきた。dhātupāṭha 自体、その作者が果たしてパーニニなのか、注釈家を通じて今に伝えられる dhātupāṭha が原 dhātupāṭha とみなし得るのか、などといった問題をはらんでいる。特に、原 dhātupāṭha の形態の問題に関連しては、例えば {bhū sattāyām} における {sattāyām} といった意味記載が、dhātupāṭha を本来的に構成するものであったのかどうかをめぐって、Cardona [1980:161-3] が紹介しているように種々の重要な研究がなされてきた。しかしこの意味記載の問題ははまだ確定されるに至っていない。この問題については、Bronkhorst [1981] に近年の dhātupāṭha 研究の最新の成果が集約されている。彼は、Yudhiṣṭhira Mīmāṃsaka の包括的な dhātupāṭha 研究を下敷きにした考察を通じて、次のような諸点を明らかにしている。

(1)パーニニの Aṣṭādhyāyī および彼が使用した dhātupāṭha、カーティアーヤナの Vārttika、パタンジャリの Mahābhāṣya には、原 dhātupāṭha は意味記載を含んでいなかった、ということを示す明確な証拠はない。(2)意味記載は後代の付加であるというカイヤタの考えは、Kāśīka, Vākyapadīya, Mahābhāṣyadīpikā を関する限り、パーニニ文法学の伝統に則たものではなく、彼独自の多分に間違った当該 Bhāṣya の解釈に基づいている。(3)反対に、原 dhātupāṭha が意味記載を含んでいたということを示す証拠が Aṣṭādhyāyī そのものに見いだされる。それらは多分に今に伝わる dhātupāṭha 中の意味記載と同じものである。(4)しかしながら、Aṣṭādhyāyī および Mahābhāṣya は、それらの違いを示唆する場合もある。この点に関して、意味記載の意識的な修正を図った者がいた可能性があり、その者が、ビーマセーナという名で呼ばれたのかも知れない。

いまここで、意味記載をめぐる原 dhātupāṭha の形態に関するこれらの論点をいちいち検証するつもりはない。原 dhātupāṭha とみなされ得るものがどのような形態のものであろうと、当該 Bhāṣya からは、{bhvedha} という〈読み上げ〉の実際的な可能性が指摘されている。これの意図するところ、このような〈読み上げ〉が提起されるその根拠こそが明らかにされねばならない。

ところで、この形態の〈読み上げ〉はまた、カーティアーヤナに知られる dhātupāṭha には、意味記載はなかった、という主張の根拠ともなっている。すなわち、もし {bhū sattāyām; edha vṛddhau} というように「dhātu」項目が意味記載とともに読み上げられたとするなら、〈bhū〉という記載項目の後に〈bhū〉と〈edha〉を区別するような形で意味記載が読み上げられるから、〈bhvedha〉に術語「dhātu」が適用される懸念は生じないであろう、というものである⁸⁰。しかしながら、このように考えても、事態は何等変わらないであろう。なぜなら、音連鎖として考えた場合、やはり意味記載を含んでも、分節化の根拠の問題は残るからである。〈bhūsattāyām〉が「dhātu」でないとなら何に基づいて言い得るのか。言語項目とその意味との区別と対立を前提する限りにおいて、意味記載は区別要素足り得るであろうが。

ここで〈読み上げ〉による術語「dhātu」の適用 (pāṭhena dhātusamjñā) が、次の Bhāṣya [シノプシス1.4.1] に代案として提起される意味論的な術語規定 {kriyāvacaṇo dhātuḥ} と対立的に扱われていることに留意すべきである。すなわち、この〈読み上げ〉依存の術語適用は、意味のレベルに立ち入らずに術語を適用する場合を想定しているのである。これに対して、意味論的な術語規定においては、ある言語項目に術語「dhātu」が適用されるのは、それが〈行為〉を表示するものである限りにおいてである⁸¹⁾。すでにカーティアーナには、一連の音連鎖を分節しそれから有意味単位を抽出する理論——anvaya と vyatireka に基づく推理——が知られていた。その理論においては分節化は意味を契機とする。dhātupāṭha 中の「dhātu」項目は、どのようにして措定されたものなのであろうか。確かなことは、それらの「dhātu」項目は、実際の言語運用 (śabdaprayoga) から、ある文法家 (パーニニ自身) が、ある論理的手続——おそらくそれは上述の分節理論——を経て、まさしく個別的な有意味単位として措定したものに他ならないということである。dhātupāṭha における個々の「dhātu」項目の自立性は、意味の個性性によって保証されているのである。しかしながら、意味を一切考慮しない〈読み上げ〉依存の術語適用においては、意味を前提し、それに依存して措定された有意味単位としての個別的な「dhātu」項目の存在は、論理的に想定されてはならない。ここにおいては、〈kūpa〉 (「井戸」) 〈sūpa〉 (「スープ」) 〈yūpa〉 (「祭柱」) が、それらの /k/ /s/ /y/ といった音に対応する意味もなく、〈ūpa〉に対応するこれら三項目に一貫する同一の意味もないために、〈k (s, y) + ūpa〉というように分節化されないのと同様の事情が考えられよう⁸²⁾。すなわち、〈読み上げ〉依存の術語適用においては、分節化の契機である意味が考慮されないために、単なる音連鎖だけが術語の適用対象とならざるを得ないのである。この意味で、当該 Bhāṣya が提起している問題は、実際的な問題ではなく、理論上の仮定的な問題であることは明白である。そして、術語「dhātu」の適用対象が分節化された有意味単位ではなく単なる音連鎖である限り、dhātupāṭha の〈読み上げ〉の形態が意味記載を含むものであろうとなかろう

と、適用対象の分節化が範囲を特定する言明に拠らざるを得ないことは本質的に同じである。しかしながら、当該規則 P1. 3. 1 *bhūvādayo dhātavaḥ* における *<ādi>* (「はじめ」) の用法は、術語「*dhātu*」の適用対象としての音連鎖を意味記載を含まない形態のものとするのである。

すでに筆者は、パーニニは *<ādi>* を用いることによって、特定の文法的特徴を共通に持つ諸項目のクラス (*gaṇa*) を指示していることを明らかにした⁸³⁾。よって、これは、*dhātupāṭha* 中にリストアップされている *<bhū>* をはじめとする諸項目が *<dhātu>* という術語で呼ばれる、というように解釈された。

<ādi> の用法に徴し、実際の *dhātupāṭha* の形態がどうであれ、*<bhūvādi>* というように *<ādi>* によって *dhātugaṇa* (「*dhātu*」のクラス) に属する一連の「*dhātu*」項目を概括して指示している限り、パーニニは術語「*dhātu*」の適用対象として、一連の「*dhātu*」項目を意図しているのである⁸⁴⁾。したがって、*<bhūvādi>* からは、{*bhū-edha-spardha...*} の連鎖が考慮されなければならない。しかも当該 *Bhāṣya* の文脈では、分節化の契機である意味を考慮しないことが前提されていることから、その連鎖は個別的な有意味単位の連続ではなく、単なる音連鎖を成すものと考えられねばならない。

ところで、*<bhvedha>* に術語「*dhātu*」の適用可能性があるということは、*<bhvedha>* (← *<bhū-edha>*, *saṁdhi* 規則 P6. 1. 77) が当規則の *<bhūvādi>* (「*<bhū>* ではじまる諸項目」) という条件を満たすものであるということである。「*<bhū>* ではじまる諸項目」といった場合、*<bhū-edha-spardha...* の音連鎖において、*<bhū-edha>* も *<bhū-edha-spardha>* も「*bhū* ではじまる」ものに他ならない。ここに、音連鎖範囲の言及の必要性が生ずる。/ū/ までのそれを限界点とする *<bhū>* が一つの単位であり、/dh/ を限界点とする *<edh>* もまた一つの単位である、というように、音連鎖範囲が特定されなければならないのである。そしてこれは「読み上げ」依存の術語適用において、分節化の契機である意味が顧慮されないことに起因しているのである。さらには、当該 *Bhāṣya* の文脈、*<ādi>* の用法を見る限り、術語「*dhātu*」の適用対象として提示された *<bhvedha>* が、原 *dhātupāṭha* が意味記載を含んでいたか否かとい

う問題に与かり得ないことも明らかである⁸⁵⁾。

II. 諸注釈家の意味記載をめぐる議論

以上によって、当該 Bhāṣya において術語「dhātu」の適用対象として〈bhvedha〉が提示される意図が明らかとなった。次には、Pradīpa においてカイヤタが提起する意味記載に関わる問題を取り上げよう。それは、次の二点にわたる。(1)意味記載が apāṇiniya であるということの意味。(2)意味記載の機能——paricchedaka と niyāmaka とは何か。そして、これらの問題を論ずるに先立って、意味記載に関するバットージとナーゲーシャの見解もここに紹介しよう。

バットージ⁸⁶⁾ — 「{yā prāpane} (II. 40 「yā は到達の意味で [起こる]」) といったものにおける意味の言及 (arthanirdeśa) は、制限者 (niyāmaka) ではない。なぜならそれ [意味の言及] は、パーニニによっては与えられていない (apāṇiniya) から。というのも、ビーマセーナなど [の学識者] が [「dhātu」項目の] 意味を教示したと伝承されているからである。一方、パーニニが〈bhvedha〉などというように読み上げた (pāṇinis tu bhvedha ityādy apāṭhit), ということは、Bhāṣya や Vārttika に明らかである。

さらに、それをなしたのが学識者であろうと現になされている意味の言及は、[言及されている意味とは] 別の意味の排除を意図しているわけではない。なぜなら、{sukham anubhavati} (「彼は心地よさを感じている」) などにおける [感受を意味する anu√bhū の 〈bhū〉が] 「dhātu」ではないということが帰謬するから。」

ナーゲーシャ I⁸⁷⁾ — 「意味の言及は、[「dhātu」項目と] 逸脱的な関係にあるから、有効性を持たない。したがってそれは区別するもの (vyavasthāpaka) とはならないから、音連鎖範囲の言及もまたなされるべきである。」

ナーゲーシャ II⁸⁸⁾ — 「『[そして {bhū sattāyām} などにおける] 存在などの意味の言及は、〈例示〉 (upalakṣaṇa) である。』 (SK2232 [P8. 4. 18])

『そして意味の言及は』 : {bhū sattāyām} といった [意味の言及] は、学識者がなした、という意味である。そしてその [意味の言及] は、[「dhātu」が〈行為〉を表示するものであるということの理解のためになされている、というのがここにひそんでいる意味である。

一方、パーニニは、[dhātupāṭha における「dhātu」項目のうち] ある一群のものは意味なしに読み上げ、またある一群のものは意味と共に読み上げている (pāṇinis tu kāmścid artharahitān paṭhati, kāmścid arthasahitān)。

まさにこのゆえに、1) P1. 3. 1 に関して、『音連鎖範囲の言及がなされるべきである。なんとなれば、[さもなくば] 〈bhū〉という音単位は 〈dhātu〉という術語を得るであろうが、〈bhvedha〉という音単位は 〈dhātu〉という術語を得ないであろう、というこのことが、何に基づいて [知られよう]』というように Bhāṣya において言われている。

2) P1. 3. 7 に関して、『彼[パーニニ]は、IT-IR を有する一群の [「dhātu」項目] を、オーグメント nUM (P7. 1. 58) を付して、{UbundIR niśāmane} (「UbundIR は覚知の意味で [起こる]」) {skandIR gati-śoṣaṇayoḥ} (「skandIR は進行・乾燥の意味で [起こる]」) というように読み上げている。このことから、IT-IR を有する [「dhātu」項目] に、単音 /i/ を「IT」とする [「dhātu」項目] に関わる文法規定は適用されない [と知られる]』というように Bhāṣya において言われている⁸⁹⁾。

3) P3. 1. 19 に関して、Bhāṣya に、『一体全体誰が √pac などを〈行為〉を表示するものたらしめるような努力をしよう [意味は教示されるものではなく、表示能力の本性から理解されるものである]⁹⁰⁾、そしてさらに『実際また師 [パーニニ] は、ある場合には一つの [意味を教示し]、ある場合にはまったく [教示し] ない、というように [意味について] 多様な扱いをしている』というように言われている。

『〈例示〉 (upalakṣaṇa)]: これに対しては、「[「dhātu」はさらに多くの意味

を担う」(anekārthā api dhātavo bhavanti) という Bhāṣya⁹¹⁾ が根拠である。そしてこの [「dhātu」がさらに多くの意味を担うということは]、この Bhāṣya における「さらに」(api) という語が示すように、際限なくということではなく、その実際の運用に随順する限りにおいて、ということである。

そして以上の [ように意味の言及がすべての「dhātu」項目に関してなされているわけではない] 場合、P8. 3. 113 sedhater gatau「進行 (gati) を意味する √sidh の…」において [{gatau}] というように [意味が] 言及されていることから、dhātupāṭha I. 48] {ṣidhA gatyām} における [{gatyām} という] 意味の言及は、パーニニが与えたものではない (apāṇiniya)、と理解さるべきである。[なぜなら、その dhātupāṭha においては、パーニニ自身が与えたこの {gatau} という形式の意味言及を離れて、{gatyām} という形式の意味言及が与えられているから。]

(1) apāṇiniya パーニニが、dhātupāṭha 中の「dhātu」項目をどのような形で読み上げたかに関して、二見解が表明されている。バットージは、その〈読み上げ〉の形態を {bhvedha...} といった「dhātu」項目の連接〈読み上げ〉(sāṃhitāpāṭha) とする (pāṇinis tu bhvedha ityādy apāṭhīt)。ナーゲーシャは、これに対して別の解釈を提示する。

ナーゲーシャによれば、パーニニは、dhātupāṭha 中の「dhātu」項目を、ある場合には意味記載を伴った形で読み上げ、またある場合には意味記載なしに読み上げている (pāṇinis tu kāṃścid artharahitān paṭhati, kāṃccid arthasahitān)。彼はここで、パーニニによる意味記載なしの「dhātu」項目の〈読み上げ〉の根拠として当該 Bhāṣya [(1)] を挙げ、意味記載を伴う「dhātu」項目の〈読み上げ〉の根拠として P1. 3. 7 に対する Bhāṣya [(2)] を挙げている。これによってナーゲーシャは、パーニニが意味の言及を「dhātu」項目のすべてに関してなしているわけではないということを行わんとしているのである。dhātupāṭha における「dhātu」項目に関するこの意味の言及の非全般性の根拠として続いて彼が挙げるのが P3. 1. 19 に対する Bhāṣya の一節 [(3)] で

ある。彼はそこに意味教示 (arthādeśana) の問題に即して、パーニニが「dhātu」項目に関して意味をある場合には言及し、またある場合には言及していないということの端的な表明を求めているのである⁹²⁾。原理的に、パーニニ文法学においては、意味は教示されるものではなく、ことばの表示能力の本姓から理解されるものである。ところで諸規則において意味の言及 (arthanirdeśa) がある。この意味の言及 (arthanirdeśa) は、意味教示 (arthādeśana) を目的としない。意味は文法規則の適用の根拠 (nimitta) として言及されている⁹³⁾。つまり、dhātupāṭha 中の意味記載は意味の教示ではない。しかしながら、このような原則を踏まえた上でなお、この Bhāṣya ad P3. 1. 19 は、意味の言及は意味の教示であるという前提に立っている点に留意するべきである。そのことは、ナーゲーシャが、「dhātu」項目の意味は教示されるのではなく理解されるのであるという趣旨の Bhāṣya の一節 [(3)]「一体全体誰が、云々」に対して「√pac などは、まさに意味記載なしに読み上げられるから⁹⁴⁾」というように注釈していることから明らかである。これは、√pac などに関する意味の言及があるとすれば、その意味の言及は意味の教示とみなされねばならないことを示すものであろう。したがって、ナーゲーシャは、意味の言及を「根拠」ではなくまさに意味の教示のアスペクトで捉え、「dhātu」に関する意味教示の非全般性を意味言及の非全般性と解しているのである。

このように、意味記載が apāṇiniya であるということは、バットージの解釈に従えば、パーニニは、dhātupāṭha 中の意味記載をまったく与えず、「dhātu」項目を読み上げる際、まったく意味記載を伴わなかった、ということになり、一方、ナーゲーシャの解釈に従えば、パーニニは、すべての「dhātu」項目に関して意味記載を伴って「dhātu」項目を読み上げているわけではない、「dhātu」項目のすべてに関して意味を言及しているわけではない、ということになる。これはナーゲーシャ I に、「意味の言及は、[「dhātu」項目と]逸脱的な関係にあるから」(arthanirdeśasya vyabhicaritatvat)⁹⁵⁾という言葉を通じて明確に主張されているところのものである。

ところで、ナーゲーシャが言うように、パーニニが「dhātu」項目の〈読み

上げ〉に際してある場合には意味記載なしに、またある場合には意味記載を付して読み上げるというように、異なる態度をとったとするなら、その理由は何か。意味記載なしの {bhvedha} という形態の〈読み上げ〉に関して言えば、パーニニの眼前にはすでに諸「dhātu」項目が個別的な有意味単位として与えられていたということが、恐らくその形態の〈読み上げ〉の理由なのである。

バットージの見解とナーゲーシャの見解に共通して言えることは、彼らが dhātupāṭha 中の諸「dhātu」項目の個別性・自立性を所与のものとして前提した上で、「dhātu」項目がどのような形態でパーニニによって読み上げられたのかを問題にしているということである。当該 Bhāṣya は、術語「dhātu」の適用対象としての諸「dhātu」項目の個別性・自立性そのものの確立を目指しているのである。彼らは、その意味で、術語「dhātu」の適用対象として〈bhvedha〉を提示したパタンジャリの意図から離れて、この Bhāṣya を利用していると言える。

(2) 意味記載の機能 カイヤタ以降のパーニニ文法家にとって、dhātupāṭha 中の意味記載は、バットージ流の解釈では、ビーマセーナといった学識者が新規に付加したものであり、ナーゲーシャ流の解釈では、学識者が体系的に整備・修正したものである。しかしながら、意味記載が dhātupāṭha の一部を形成する経緯がどのようなものであれ、カイヤタの時代にはすでに現在の dhātupāṭha とほぼ同一の形態のそれが成立していたことは確かなことである。次には、その dhātupāṭha 中の意味記載を所与のものとみなして、その機能・役割といったものに考察を加えることにしよう。

さて、意味記載が dhātupāṭha 中に与えられているとしよう。その場合、意味記載はどのような機能を有するであろうか。二つの機能——画定者 (parichecka, vyavasthāpaka) としてのそれと制限者 (niyāmaka) としてのそれとがあることが指摘されている。

画定者としての意味記載の機能は、「特定の意味記載によってその境界が示される項目に術語「dhātu」が適用される」という形で、諸「dhātu」項目を区分することにおいて果たされる。すなわち、意味記載は、〈bhvedha〉を

〈bhū〉と〈edhA〉に区分するものとし機能するということである。これはどういうことであろうか。カイヤタの当該 Bhāṣya の注釈から、意味記載がある場合には、音連鎖範囲の言明は必要ではなくなるということが知られる。dhātupāṭha が意味記載を含み、例えば {bhū sattāyām} というように読み上げられたとする。その場合、この形態の〈読み上げ〉から、「bhū は存在の意味で〔生起〕する」という理解が生ずるはずである。それが単なる音連鎖として捉えられるわけではないであろう。そしてこのようにそれを理解することは、〈bhū〉という言語項目を存在という意味を担う有意味単位として把握することに他ならない。したがって、{bhū sattāyām} という意味記載を伴う形態の〈読み上げ〉においては、音連鎖の分節化の契機である意味が与えられるのである。この意味で意味記載は諸「dhātu」項目を区分するもの足り得るのである。そして dhātupāṭha には、その機能の担い手である意味記載自体がまったく存在しない、あるいは部分的にしか存在しないということにおいて、諸「dhātu」項目を区分する手段は、意味記載以外のものに求められざるを得ないのである。

一方、意味記載が制限者として機能するということは、dhātupāṭha において言及されている〈bhū〉といった言語項目が、そこに言及されている意味でのみ術語「dhātu」を得るということである。次のように言われる。

「〔〈bhū〉をはじめとする「dhātu」項目の〕クラスに読み上げられている項目だけが術語「dhātu」を得ると考える場合、〔dhātupāṭha 中の〕意味の言及は無意味であるということになるから、〔それらの項目は、dhātupāṭha において〕言及されている意味だけを担うものである限りにおいて、術語「dhātu」を得る、と知られる。」⁹⁶⁾

意味記載のこの制限者としての機能によって、非「dhātu」項目の同形語に対する術語「dhātu」の適用は阻止され得る。例えば dhātupāṭha 中には {vā gatigandhanayoḥ} (「vā は進行・危害の意味で起こる。») というように〈vā〉が言及されているが、術語「dhātu」は、この意味での〈vā〉に対してだけ適用され、任意性 (vikalpa) などを意味するそれと同形の「prātipadika」〈vā〉

に対しては適用されない⁹⁷⁾。

これは確かに意味記載が与えられている場合の一つの有利な点である。しかし、「dhātu」項目の実際的な運用 (prayoga) においては、dhātupāṭha 中に与えられている意味を越えてそれは使用される。パーニニ文法家にとって、「dhātu」項目は複数の意味を担い (anekārthā api dhātavo bhavanti)、その種々の意味は「upasarga」によって標示される (dyotyā)。例えば、anu√bhū において、<bhū> は dhātupāṭha 中に言及される存在ではなく感受 (upabhoga) を意味する⁹⁸⁾。この <bhū> が上述の制限によって術語「dhātu」を得なくなることは明白である。ここに dhātupāṭha 中の意味の言及を〈例示〉(upalakṣaṇa) とする根拠があるのである⁹⁹⁾。こうして、dhātupāṭha 中の意味記載は、その意味でのみ「dhātu」項目に術語「dhātu」の適用を許す制限者ではない、ということがカイヤタをはじめとするパーニニ文法家の共通認識である。

1.4.1. [BHĀṢYA]

しかしながら、もし「〈行為〉(kriyā) を表示するものが「dhātu」[と呼ばれる]」(kriyāvacaṇo dhātuḥ) というように規則 (lakṣaṇa) が定式化されたとするならば [vts. 1-2 に指摘された〈読み上げ〉に基づく術語「dhātu」の適用の場合の問題点は回避されるであろう。]

[PRADĪPA]

「〈行為〉(kriyā) を表示するものが」：このように [規則が定式化されたと] するならば、[dhātupāṭha 中に読み上げられている項目と] 同形語の [非「dhātu」項目が術語「dhātu」を得ることの] 禁止が言明される必要はない。

さらに音連鎖範囲の言及 [がなされる必要] もない。なぜなら、<bhvedha> という音単位 [はその部分は〈行為〉を表示するものであっても、そ] の全体は〈行為〉を表示するものではないから¹⁰⁰⁾。

ノート (11)

すでに Bhāṣya [シノプシス1.2] において、当該規則 P1. 3. 1 bhūvādayo dhātavaḥ における 〈bhūvādi〉 が dhātupāṭha の存在を前提し、dhātupāṭha 中に読み上げられている項目に術語「dhātu」の適用がある (pāṭhena dhātusamjñā) ということがそれから導かれることが述べられている。しかし、それに対して、vt. 1: pāṭhena dhātusamjñāyām samānaśabdapratīṣedhaḥ によって、単に dhātupāṭha に読み上げられているということだけに基づいて術語「dhātu」の適用がある場合、それに読み上げられている項目と同形の非「dhātu」項目に術語「dhātu」が過大適用されることになり、したがって同形の非「dhātu」項目に対する術語「dhātu」の禁止規定が設定されなければならないということが指摘された。さらに vt. 2: parimānagrahaṇam ca によっては、同じ条件下では、「dhātu」項目の「bhū ではじまる」(〈bhūvādi〉) 音連鎖である {bhū-edha-spardha...} という読み上げにおいて、どこまでが一つの単位かその範囲が特定されなければならない、ということが指摘された。

そこでいま、〈bhūvādi〉という 〈ādi〉 の使用による概括的な「dhātu」項目の指示に代えて、意味の側面からの術語「dhātu」の適用規則が提案される。カイヤタは、すでに当該の {bhūvādayo dhātavaḥ} という形式がパーニニによって {kriyāvacaṇo dhātuh} という形式に代えて採用された理由を転化形 (apabhraṁśa) への術語「dhātu」の適用の排除として説明した¹⁰¹⁾。したがってここに〈読み上げ〉に依存する限りで招来される難点の回避のためにのみ、〈読み上げ〉に依存しない形式での意味論的な術語「dhātu」の適用規則が提案されることになる。

追加参考文献略号

- Bronkhorst, Johannes. [1981] "Meaning Entries in Pāṇini's Dhātupāṭha." *Journal of Indian Philosophy* 9:335-57.
- Cardona, George. [1980] *Pāṇini: A Survey of Research*. Delhi: Motilal Banarsidass.

- [1988] *Pāṇini: His Work and Its Traditions*. Vol. 1: *Background and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Fillozat, Pierre Sylvain. [1986] *Le Mahābhāṣya de Patañjali*. Publication de l'Institut Français d'Indologie No. 54, 5. Pondichéry: Publications de l'Institut Français d'Indologie.
- Katre, Sumitra Mangesh. [1967] *Pāṇinian Studies*. I. Poona: Deccan College.
- MDhV *Mādhavīya Dhātuvṛtti* of Sāyaṇa. Ed. Dwarikadas Shastri. Varanasi: Prāchya Bhārati Prakāshana, 1964.

注

- 76) {iyān} (<iyat> ← idam + vatUP) は、P5. 2. 40 に基づき、「その量 (parimāṇa) がこれ [だけ] のもの」({idam parimāṇam asya}) という意である点に留意。<bhū> の場合、限界点 (avadhi) は /ū/ 音である。
- 77) 「学識者」について、ナーゲーシャは、「[意味を dhātupāṭha 中に取り入れたのは] 伝承が伝えるところでは、ビーマセーナ (Bhīmasena) である」(bhīmasenenety aitihiyam) と述べている。
- 78) Cf. Pradīpa on Mbh ad P1. 4. 56: viśiṣṭāvadhīparicchinnyas samudāyasya . . . Uddyōta: rīśvararūpāvadhīparicchinnyasamudāyasyety arthaḥ.
- 79) MDhV1: bhū sattāyām vartata iti śeṣaḥ. <bhū> といった「dhātu」項目は、anukaraṇaśabda (擬声語) である。その対象である声音 (anukārya) との差異が意図されない場合、それは「prātipadika」ではない。よって、名詞接辞の後続はない。Cf. VBhS on k. 27: *gavīy aham āha bhū sattāyām ity evamādayo yato 'nukaraṇaśabdā nukāryān na bhidyante, atas teṣām arthavattvābhāvād . . . na prātipadikatvaṁ, nāpi padatvam, atha ca sādhutvam ity upapadyate*. なお本稿は Katre [1967] 所収の dhātupāṭha を使用。
- 80) Dwarikadas Shastri [MDhV 15] による Yudhiṣṭhira Mīmāṃsaka [*Saṁskṛta Vyākaraṇa-Śāstra kā Itihāsa* (1973)] の dhātupāṭha に関する所論のサンスクリット訳による。Cf. Cardona [1988:100]; Uddyotana on P1. 3. 1: bhūsattāyām edha vṛddhau ity arthavaśād avadhīparicchedo bhaviṣyati.
- 81) Kāśikā ad P1. 3. 1: bhū ityevamādayaḥ śabdāḥ kriyāvacanā dhātusañjñā bhavanti に代表される当該規則の解釈においては、<読み上げ> と意味論的規定の両者を取り込まれている。これは言語と意味の両レベルから術語「dhātu」の適用対象を規定しようとするものである。<読み上げ> 依存の術語適用には意味が参入しないことが

このことから窺われる。

- 82) Cf. Mbh ad vt. 15 (pratyāhārāhnikā, hayavarat̥ṣ; VP II, k. 169: na kūpasūpayūpānām anvayo 'rthasya dṛṣyate / ato 'rthāntaravācītvaṁ saṁghātasyaiva gamyate //
- 83) 拙稿「Mahābhāṣya ad P1. 3. 1 研究⁽¹⁾」、ノート⁽³⁾。
- 84) 従来の研究者は当該規則における〈adi〉の用法に着目することはなかった。この〈adi〉の用法から、「dhātu」項目が意味記載と共に読み上げられたとするなら、意味記載が「dhātu」項目の境界区分を示すものとして機能したはずである、という言い方は不可能であることが明らかとなる。そもそもここにおける〈adi〉の用法は、意味記載を予想しない。
- 85) Bronkhorst [1981:346] は、意味記載を含む dhātupāṭha を前提してカーティアアーヤナは vts. 1-2 ad P1. 3. 1 を言明し、パタンジャリはそれを正しく理解しなかったために当該 Bhāṣya のように術語「dhātu」の適用対象として〈bhvedha〉を提起するに至った疑いもあると述べる。彼はそのために次のように当該 Vārttika を読む。“Owing to the Dhātupāṭha, [utterances] of the same sound-pattern [as verbal roots] are prevented from [assuming] the designation ‘root’; and the measure [of the individual roots] is known.” しかし後続の vt. 3 において〈読み上げ〉に対立するものとして「[「dhātu」が]〈行為〉を表示するものである場合」(kriyāvācane) というように言われていることを考えるならば、このように読むことはできない。ここにおけるパタンジャリの解釈は、Vārttika の文脈に沿うものである。
- 86) ŚK on P1. 3. 1: na ca yā prāpaṇe ityādyarthanirdeśo niyāmakaḥ. tasyāpāṇinīyatvāt. bhīmasenādayo hy arthaṁ nirdidiśur iti smaryate. pāṇinis tu bhvedha ityādy apāṭhid iti bhāṣyavārttikayoḥ spaṣṭam. kiñca abhiyuktair api kṛto 'rthanirdeśo nārthāntaranivṛttiparaḥ, sukham anubhavatītyādāv adhātutvaprasaṅgāt.
- 87) Uddyota on Mbh ad P1. 3. 1: arthanirdeśasya vyabhicaritvatnāprayojakatvād vyavasthāpakatvābhāvena parimānagrahaṇam api kāryam iti bhāvaḥ.
- 88) LŚ469 (on SK2232 [P8. 4. 18]: sattādyarthanirdeśaś copalakṣaṇam): arthanirdeśaś ceti. bhū sattāyām ityādir abhiyuktakṛta ity arthaḥ. sa ca kriyāvācītvabodhārtha itī bhāvaḥ. pāṇinis tu kāmścid artharahitān paṭhati, kāmścid arthasahitān. ata eva bhūvādisūtre parimānagrahaṇam kartavyam. kuto hy etat, bhūśabdo dhātusamjño bhaviṣyati na punar bhvedhaśabdaḥ itī bhāṣye uktam, cutū (P1. 3. 7) itī sūtre yad ayam iritaḥ kāmścin numanūṣaktān paṭhati, ubundir niśāmane, skandir gatiśoṣaṇayor itī, tena neritām ididvidhiḥ itī bhāṣye uktam, tathā

namovariva (P3. 1. 19) iti sūtre bhāṣye uktam—kaḥ khalv api pacādīnām kriyāvacanatve yatnaṁ karotīti, atha khalv apy ācāryaś citrayati kvacid ekaṁ kvacin na iti. upalakṣaṇam iti. anekārthā api dhātavo bhavanti iti bhāṣyam atra mānam. tac ca prayogānusāreṇaiva, na tv amaryādam. bhāṣyasthāpiśabdāt. evaṁ ca sedhater gatau (P8. 3. 113) iti sūtre gatau ity upādānāt śidha gatyām ity arthanirdeśo 'pāṇinīya iti bodhyam.

- 89) ナーゲーシャは、〈読み上げ〉が或る場合には意味記載を伴うものであることをこの Bhāṣya が示唆していると明言している。Uddyota [P1. 3. 7]: etadbhāṣyāt keṣāncid dhātūnām arthanirdeśasahito 'pi pāṭha iti jñāyate.
- 90) Cf. Mbh ad P3. 1. 19: na caiva hy arthā ādīśyante kriyāvacanatā ca gamyate; Pradīpa: abhidhānaśaktisvābhāvyaḍ antareṇāpy arthādeśanaṁ viśiṣṭakriyāvacanavasya siddhatvād ity arthaḥ.
- 91) Mbh ad P1. 3. 1: bahvarthā api dhātavo bhavanti. これは、Ratnaprakāśa において「[「dhātu」は] dhātupāṭha に言及されている意味以外の意味をも担う」(dhātupāṭhanirdarsītārthātīrktārthakā api) というように解釈されている。Cf. Candradhātupāṭha: kriyāvācītvam akhyātum ekaiko 'rtho pradarsītaḥ / prayogato 'nusarttayā anekārthā hi dhātavaḥ // (Palsule [116])
- 92) Bronkhorst [1981:347-8] はこの意味指示としての意味記載の問題を扱っているが、以下に論ずる意味記載が持つであろう意義を捉えていない。
- 93) Helārāja [VPIII, bhūyodravya, k. 2] は、次のように述べる。「意味は、被規定項としてではなく例示的なものとして〔文法規則の適用〕根拠であることが、『意味は指示されないから』というように文法学においては述べられている。〔文法学においては〕世間的に周知の意味を再言して、正しいアクセントなどの説明のために指示がなされている。」(upalakṣaṇatvenārthānām āngabhāvaḥ śāstre samāmnātaḥ, na vidheyatvena, arthānādeśanāt [Mbh on vt. 1 ad P2. 1. 1] iti [.] lokaprasiddham artham anūdyā svarādisaṁskārāyopadeśaḥ.) Cf. VP7, k. 170.
- 94) Uddyota on Mbh ad P3. 1. 19: pacādīnām artharahitānām eva pāṭhāt.
- 95) Filliozat [1986:16]: “la mention des sens ne correspondant pas à l'usage observé n'est pas un facteur déterminant” は明らかに誤訳である。ここにおける vyabharitvatva は、「dhātu」項目に関する意味の言及の逸脱的な関係を指しているのである。驚くべきことに、従来の研究者はナーゲーシャのこのようなパーニニによる非全般的な意味言及という解釈に触れていない。Cf. BM on SK2232 (P8. 4. 18): sarveṣu dhātuṣv arthanirdeśas tv ādhunikāḥ; BM on SK2407 (P3. 1. 47): sar-

vadhātuṣv arthanirdeśasya apānīniyatvād... kvacid eva dhātuṣv arthanirdeśaḥ pānīniyaḥ...

96) Darpaṇa on VBhS ad k.10: gaṇe paṭhitānām eva dhātutvasyābhipretatve 'rthanirdeśavaiarthyaṣṭyā nirdiṣṭārthānām eva dhātutvaṁ jñāpyate.

97) 拙稿「Mahābhāṣya ad P1. 3. 1 研究(2)」、ノート(7)を見よ。

98) Cf. SK2232 (P8. 4. 1): upasargās tv arthaviśeṣasya dyotakāḥ; VP11, k. 190; BM: anubhava upabhogaḥ.

99) 意味記載が〈例示〉を目的としているということは、次のような事例から知られる。

1) dhātupāṭha I. 21-24 {kurdA khurdA gurdA gudA kriḍāyām eva} (「kurdA, khurdA, gurdA, gudA は遊戯の意味でのみ [起こる]」)における制限詞〈eva〉(「のみ」)の使用は、〈kurdA〉等に言及されている意味以外の意味を表示する可能性があることにおいて有効である。Cf. MDhV2: arthanirdeśasyopalakṣaṇatva eva kurda khurda gurda kriḍāyām eva ity evakāropapattiḥ; MDhV61: atraivakāro dhātūnām anekārthatve jñāpaka ity uktam; ŚK11. 50. なお、第4項目〈gudA〉に関してそれを別立てとする見解もある。Cf. MDhV61. 2) P3. 1. 46 śliṣa āliṅgane は、√śliṣA が抱擁を意味する場合にのみそれに後続する CII に Ksa が代置されることを規定している。ところで dhātupāṭha IV. 77 には {śliṣA āliṅgane} が与えられている。P3. 1. 46 はその dhātupāṭha に記載された意味以外の意味が〈śliṣA〉にはあることを示唆している。Cf. ŚK11. 50: śliṣa āliṅgane ityādisūtrāṇy apīha jñāpakāni. 3) dhātupāṭha I. 4 {gādhR pratiṣṭhālipsayor granthe ca} (「gādhR は、滞留・追求そして編集の意味で [起こる]」)のように意味記載部分に複数の意味が言及されている場合がある。これは、「dhātu」項目が複数の意味を担うその複数の意味の詳説を目的としている。MDhV2: gādhR pratiṣṭhālipsayoḥ ityādau tv anekārthābhidhānam prapañcārtham.

Palsule [1961:107-127] は、当該 dhātupāṭha の〈eva〉の用法に関して、以上のような伝統的な解釈に異を唱えている。彼によれば、この場合の〈eva〉は直前の dhātupāṭha I. 20 {urdA māne kriḍāyām ca} の {māne} (「量るという意味で」)の排除を目的としている。したがって、それは例示性を示唆するものではない。しかしながら、〈eva〉のもつ制限 (niyama) の機能よりして〈kurdA〉等にその実際的運用において māna 表示の可能性がなければ、māna は排除対象たりえない。また彼は、dhātupāṭha 中の〈ca〉(「そして」)の用法に関しては、後代の付加を示すものと考えている。

100) ナーゲーシャは、構成要素は有意味であっても全体としては意味をなさない例として、パタンジャリが挙げる有意味な「pada」項目の集合としての無意味な文 (anar-

thaka-vākya) を引いている。Uddyota: avayavānām vācakatve 'pi daśadāḍimādivat samudayo 'narthaka iti bhavaḥ; Mbh on vt. 2 ad P1. 1. 1: daśadāḍimāni, ṣaḍapūpāḥ, kuṇḍam, ajājinam, palalapiṇḍaḥ, adharorukam etat kumāryāḥ, sphaiyakṛtasya pitā pratiśīnaḥ.

- 101) Pradīpa on Mbh ad P1. 3. 1: tatra yadi kriyāvāci dhātur ity etallakṣaṇam kriyeta tarhi ānavayati vaṭṭayatītyādinām api dhātusamjñā syāt. 拙稿「研究(1)」、pp. 61-2 を見られたい。〈bhūvādi〉形式の術語適用規則の目的として vt. 12-13 は、まさしくカイヤタの指摘する転化形問題とさらにアクセント・指標辞教示を取り上げる。シノプシス [「研究(1)」] 5 において詳論するであろう。

(未完)

A STUDY OF THE MAHĀBHĀṢYA AD P1. 3. 1 (4)

Hideyo OGAWA

SYNOPSIS (4)

1. 3. 2. [*Vārttika*] If the term *dhātu* is assigned to an item by virtue merely of its being recited in the *dhātupāṭha*, another kind of provision has to be made that such and such a particular stretch of sound constitutes a separate *dhātu* (vt. 2: *parimānagrahaṇam ca*).

In his *Bhāṣya* on this *Vārttika*, Patañjali states: “But for such a provision, one might consider the sequence *bhvedha* a single unit, instead of considering *bhū* and *edhA* as two distinct units.” This statement has been taken as showing that the original *dhātupāṭha* contained no meaning entries (*arthapāṭha*). A few points of importance must be set out:

1) *Parimānagrahaṇa* (‘mention of the measure’) is required as far as *bhū* and *edhA* are assumed to have no meanings whatsoever. There do not really arise problems of this sort in determining what are the units in the *dhātupāṭha*, since in Pāṇini’s grammar the units in the text are postulated as individual, meaningful ones, like the members of a *cādi*-group. What is meant by Patañjali here is that one cannot make the segmentation of a given sound-sequence into its constituents without taking into account the meanings to be expressed by them; meanings are essential for dividing a given chain of sounds into the meaningful units.

2) Therefore, from the context of the *Bhāṣya* one has to learn that the question raised is how to mark off the sequence *bhvedha* without bringing

in the meanings. Only on the assumption that the root entries are given as distinct, meaningful units in the *dhātupāṭha*, one may talk about Pāṇini's way of reciting them.

3) Meaning entries, as they from a part of the *dhātupāṭha*, discriminate (*parchedaka*) given root entries, not in such a way that a meaning entry intervenes between two root entries, but in the way that it serves to know a given root entry to be a meaningful unit, that is, to provide the ground for the segmentation. As far as I know, no scholars interested in the *dhātupāṭha* noticed this point.

4) Considering that Pāṇini refers to root entries by saying *bhūvādayaḥ* in the present rule, it seems to be reasonable that Patañjali speaks of *bhvedha*, since by using *ādi* a set of items to be called *dhātu* is referred to.

1. 4. 1. New formulation of the definition rule for the term *dhātu* is proposed: *kriyāvacano dhātuḥ* ('a speech unit that signifies an action is called *dhātu*'), as opposed to the definition based on the *dhātupāṭha* (*pāthena dhātusamjñā*).

(To be continued.)